

乳幼児の細菌性髄膜炎を予防する「ヒブワクチン」が昨年12月、発売された。有料で受ける「任意接種」だが、保護者の希望が殺到し、接種まで半年以上待つという地域もある。6月には、4年前から事実上中断していた日本脳炎の新ワクチンの接種が始まったものの、自治体からの通知はなく、親からは不安の声が上がる。公費負担の予防接種が少なく「ワクチン後進国」と呼ばれる日本。対応に揺れる現場を探った。

「知り合いの子がヒブワクチンの接種を受けたと聞いたので予約したが、半年待ちと言われた」。奈良市の主婦(34)は驚きの表情を見せる。

乳幼児の細菌性髄膜炎

たヒブワクチンは既に100カ国以上で用いられている。一方、日本ではおたふくかぜなどと同様、任意接種の扱いで、1回7千～8千円の費用

ワクチンが足りない

今年2月から需要が供給を上回り、「発売直前に不足するリスクを感じた(同社)」という。

上回っており、同社は来年7月以降は年300万本、11年7月からは出生数の全数をカバーできる年400万本体制とする方針。

側が敗訴した経緯がある。武内教授は「MMR以降、厚労省は手をこまぬいてきたのではないかと指摘。さらに、導入遅れの原因として、ヒブワクチンが輸入ワクチンであることや、ワクチンは絶対安全でなければいけないという「ゼロリスク神話」が根強い」ことなどを挙げる。

国の慎重姿勢から、現場が扱いに頭を悩ませるもう一つのワクチンが日本脳炎だ。厚労省は05年、重い副作用が否定できない、として自治体に「積極的な勧奨」を差し控えるよう勧告。予防接種法で定める定期接種ワクチンであるにもかかわらず、保護者の元に「接種券」が届かないなど事実上、中止された。

▼予防接種法 疾病のまん延防止という社会的防衛的な観点から1948年に制定。指定する疾病に対するワクチン接種を義務付けていたが、ワクチン副作用の被害者らの訴訟で国が敗訴したのを契機に94年に大幅に改正され、「努力義務」となった。

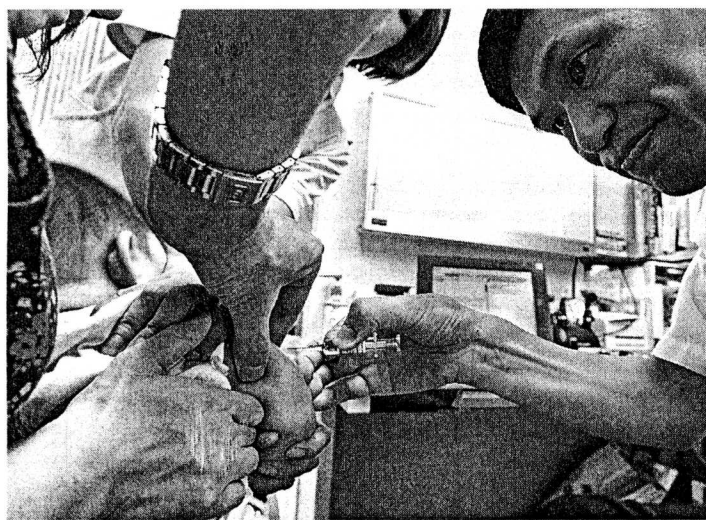
集団接種は減り、原則、接種する人(保護者)の判断で医療機関などに出向く方式となった。現在、ワクチン定期接種の対象疾病はジフテリア、百日せき、急性灰白髄炎(ポリオ)、麻疹(はしか)、風しん、日本脳炎、破傷風、結核に加え、高齢者が対象のインフルエンザ。

「国として、どうやって病気を子どもたちを守るのか、スタンスをはっきりしてほしい」。長男(5)が5カ月の時に細菌性髄膜炎にかかり後遺症を抱える「細菌性髄膜炎から子どもたちを守る会」の代表、田中美紀さん(37)は訴える。

一方、ヒブワクチンを無料で受けられる「定期接種」としては「検討はしていない」。日本脳炎ワクチンの勧奨差し控え中に未接種となった子供に対する措置も、「専門家による検討を進

無料化メド立たず

国が正確な罹患(りかん)数をつかみかねている状況下、同会には既に「ヒブワクチン接種を予約したが、接種前に患ってしまった」という情報が届いているという。(岡田直子、倉辺洋介)



ヒブワクチンの予防接種を受ける乳幼児(大阪府貝塚市の川崎クリニック)

各国での小児用ワクチンの定期接種状況
(●=定期接種、▲=任意接種、×=未導入)

	日 本	米 国	イギリス	フランス	ドイツ
はしか	●	●	●	●	●
ヒブ	▲	●	●	●	●
肺炎球菌	×	●	●	●	●
B型肝炎	▲	●	▲	●	●
おたふくかぜ	▲	●	●	●	●
水ぼうそう	▲	●	▲	▲	●

(注)「V P D (ワクチンで防げる病気)を知って子どもを守ろう。」の会調べ

保護者の希望殺到で 国は接種定期化には慎重

予防接種法で「定期接種」とされている子供の予防接種は三種混合(DPT)、BCG、ポリオ、MR(はしか風しん混合)、日本脳炎ワクチンの計5種類。これらに加え、水ぼうそうやおたふくかぜ、インフルエンザなどの予防接種が任意(有料)で受けられる。欧米での定期接種ワクチンの数は日本より多い。例えば米国ではヒブワクチンや細菌性髄膜炎のもう一つの主な原因菌「肺炎球菌」に対するワクチンも公費接種だ。小児用肺炎球菌ワクチンは日本ではまだ承認待ちで使えない

日本は「ワクチン後進国」

定期接種の数も少なく

状態。「V P D (ワクチンで防げる病気)を知って子どもを守ろう。」の会によると、世界保健機関(WHO)が国の定期接種に組み込むよう勧告しているものの、日本国内で定期化されていない子供のワクチンには「ヒブ」「小児用肺炎球菌」「B型肝炎」「ロタ」などがある。同会代表の園部友良日本赤十字社医療センター小児科顧問は「欧米ではそれぞれのワクチンの接種回数も多く、同時接種も進んでいる。日本の対応は『ワクチン後進国』だ」と指摘している。